



有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、スイス・バーゼルの道路標識 (1985年冬筆者撮影)

日本ではその著作はほんの一部が翻訳されただけ。入手困難であったり、すぐに絶版となった。なぜか、九十年代に創

彼女は、アメリカよりヨーロッパで人気が高い。一九八八年には、フランスでパトリシア・ハイスミス賞というミステリー賞が設けられた。たしかスイスには彼女の資料館がある。

お互いが殺し、動機不明の完全犯罪を目論む。ブルーノは母親ともども異常性格の持ち主である。ヒッチコックは母子の抑圧関係を繰り返し描いている。『サイコ』(一九六〇)

クが映像の作家であることを証明するものだろう。脚本はレイモンド・チャンドラーが担当したが、お互いのしり合うほど意見が合わなかったらしい。『レイモンド・チャンドラー語る』(一九八四 清水俊二 訳 早川)で、こんな犯罪の脚本化は不可能だと簡条書きにして理由を述べている。最終的には、チェンチ・オーモンドとの共作になった。チャンドラーは「シナリオライターとして

パトリシア・ハイスミスは米国テキサス州生まれ。一九六三年以降、四十代からヨーロッパに移り、英仏伊などで暮らす。スイスで白血病で亡くなった。



パトリシア・ハイスミス (1921~1995)

で出版された。長編二十冊、短編集八冊くらいはほぼ翻訳された。絶版の恐れがあるので、目につくとすぐに買う。それでも手元には十二冊しかない。映画化された作品は、十五本くらいか。半分はフランスやドイツ映画になる。

この映画には、すぐ目に浮かぶシーンがいくつかある。開巻、列車乗車まで、二人の男の足元だけを映していく。テニスの試合のユーマと恐怖の混在。ブルーノがライターを側溝に落とし、必死で拾おうとするサスペンス。絞め殺される妻のメガネにゆがんで映る男の姿：等々。ヒッチコック



『見知らぬ乗客』のF・グレンジャー(左)とR・ウーカ

名前を出されるのを拒否しようかと考えています」と書いている。

原作がかなり改変されたが、ハイスミスも出版第一作がヒッチコックに映画化され幸運だったと言える。

『太陽がいっぱい』(一九六〇 ルネ・クレマン)

ニノ・ロータの音楽は、題名を知らなくても、だれもが知っている。

初めて見たのが、高校二年のときだった。当時の不安感や劣等感、先行きの見



『太陽がいっぱい』のアラン・ドロ

監督のルネ・クレマンは『禁じられた遊び』(一九五五)やチャールズ・ブロンソンが大スターとなる『雨の訪問者』(一九六九)など傑作から駄作まで多々ある。トムはドイツキーを殺し、彼になります。原作の後半は、この捜査から逃

えなさがアラン・ドロに凝縮されていた。強烈な印象を受けた。映画の面白さが焼きついた一作である。主演はトム・リプリーにアラン・ドロ(当時二十五歳)。殺されるドイツキー・グリーンリーフにモリス・ロネ。その女友だちマージがマリー・ラフォレ。原作ではトム・リプリーは二つの殺人から逃げおせるが、映画はドンデン返して、わが人生の不安と罪悪感のトラウマとなった。

『アメリカの友人』(一九七七 ヴィム・ヴェンダース) 七十年代後半に(西)ドイツ映画ブームが起こり、フアスピンダー、ヘルツォーク、シュレンドルフなどの作品は日本でも大人気であった。その一人、ヴィム・ヴェンダースが、リプリーの三作目をスター監督になる前に撮ったのが『アメリカ

カの友人』である。今やリプリーは大富豪の娘と結婚し、パリに暮らししている。ハンブルグからイタリアのマフィアを殺す話をもちかけられる。それを白血病で余命のないジョナサンという額縁職人に請け負わせる。実に深刻なジョナサン(ブルーノ・ガンツ)の笑えないドタバタ悲喜劇が展開する。リプリー役はデニス・ホッパー。ヴェンダースはこの辺りまでは面白かったが、その脳ミソ肥大症に辟易して、興味がなくなった。去年、『Perfect Days』を撮り、久々に見た。役所広司の便所掃除人の日常を細かくつみ重ねる描き方に好感をもった。ところが、後半は手垢にまみれた話で、白けてしまった。

ヴェンダースに欠けているのは肉体的である。役所広司が毎日毎日、朝は缶コーヒー、昼はコンビニのサンドイッチ、夜は浅草で焼きソバなんて、こちらの体調までおかしくなる。そういう身体的感度の鈍さが、彼の限界だろう。寝る前に読む文庫本が、パトリシア・ハイスミスやウィリアム・フォークナーというさりげなきは許容できるが。大土木工事を超インテリが、ハチマキ、地下足袋姿でやっているようなクリストファー・ノーランを少しは見習うべきだ。『バットマン』三部作、『ダンケルク』『テネット』から『オッペンハイマー』まで、体力がないと深い知力は作動しない。